

KCE

Kawaguchi Chamber Ensemble

川口室内合奏団

第1回演奏会



2018年

5月5日(土)

13:30 開場

14:00 開演

リリア

音楽ホール

Program

J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンソナタ第一番より (Solo 藤本舎里)

J. S. Bach 管弦楽組曲第一番

F. J. Haydn 交響曲第一番

W. A. Mozart 交響曲第一番

ご挨拶

団長 山口 尊実

本日は、川口室内合奏団第一回演奏会にお越しくださしまして、ありがとうございます。当団は、昨年1月に、「川口に小さなオーケストラを」と準備会を開き、4月に発足いたしました。川口は音楽も盛んな街です。吹奏楽も盛んでいくつもの団体があり、コンクール等で活躍している団体さんもあります。川口市民オーケストラさんも今年創立40周年を迎え、大曲に挑んでいます。そんな中、普段なかなか接することができない「バッハ、ハイドン、モーツァルトの曲を」と室内合奏団を立ち上げました。

まだまだよちよち歩きの団体ですが、今後ともご支援よろしく願いいたします。

[解説]

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach)

(1685年3月31日-1750年7月28日)

J.S.バッハは、よく次のように言われる。「それまで忘れ去られてしまっていたバッハを、F.メンデルスゾーンが再演し、大成功を収め、再び脚光を得られるようになった」と。

確かにメンデルスゾーンによる「マタイ受難曲」の「蘇演」は大きな意味を持っていた。なにより、当時彼はまだ弱冠二十歳。楽器の変更（バッハ時代になかったクラリネットやピアノの使用）、大胆なカットなど、古典派からロマン派への流れの中、当時に合わせてフェリックス青年は編曲をし、当初反対されていたベルリン合唱協会にも最終的には積極的に協力してもらえるようになり、1829年3月11日、メンデルスゾーンは指揮者として演奏会を成功させた。

しかしだからといって、「バッハが全く忘れられていた」とは実は言えない。よくよく（少々）考えてみれば、モーツァルトの曲の中にもフーガはあるし、例えばベートーヴェンの第九の四楽章の二重フーガのように、「バッハの流れ」は脈々と継続・発展していた。庶民はバッハという人物を忘れてしまっていたかもしれないが、音楽の中にはバッハは存在していたのだ。

モーツァルトが「ぼくはいま、バッハのフーガを集めています。セバスチャンの作品だけでなく、エマニュエルやフリーデマン・バッハのも含めてです。」と手紙に書いているように（1782年4月1日付レオポルド宛）、作曲家の中ではバッハはけっして忘れられてはいなかった。ベートーヴェン以降も、シューマン、そしてメンデルスゾーンと、みな研究をし、その様式を使用していた。

ただ、確かに、聴衆（のみならず玄人も）は難解なフーガを好まなかったようである。「フーガとはある声部が他の声部から逃げていく音楽である。しかもまず最初に逃げっていくのは聴衆である。」という批評もあったようだ。（しかも、この批評はメンデルスゾーンの「前奏曲とフーガ」に対して、である。（西原稔『音楽史ほんとうの話』）

ところで、チェルニーの名は多くの方がご存じだろう。彼 (Carl Czerny) は、1791年

2月21日 ウィーン生まれ。「100番練習曲」ほか多くの曲を残している。(私も「リトルピアニスト」の途中まで進んだのだが……。)彼の校訂版は現在の原典版重視の風潮からすれば批判の対象となってしまうている感があるが、当時の状況を思えば、バッハをいかに今風に演奏するか、という視点でチェルニーがどう校訂したのかと見れば、なかなか興味深いのではないかと。

最後に、18世紀後半においてもバッハの「平均律クラヴィーア曲集」などが演奏され続けていたという点を指摘しつつ、この項を終わりにしたい。

バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ第1番ト短調 BWV1001 より

1720年、バッハ35歳(バッハ曰く「生涯の中で最良の時代」であるケーテンの宮廷学長に務めていた時)に作曲された。「無伴奏ヴァイオリンのための6曲の独奏曲、第1巻」は、3曲のソナタと3曲のパルティータからなる。バッハと親しいヴァイオリンの名手のために書かれたとも言われる。この3曲のソナタは、いずれも、緩-急-緩-急の4楽章の、教会ソナタの形式となっている。第2楽章はフーガで、第3楽章は、全体と違う調が用いられている。

※ 今回は、第2楽章フーガをカットさせていただきます。バロック時代の雰囲気が味わえるよう、少し低めのピッチにして演奏しています。バロックの響きをお楽しみください。

第1番

ト短調なので通常は♭2つのところ、1つで書かれている。これは、1つ少ない数の調号を用いる当時の記譜法か、ドリア旋法の名残であると思われる。

1楽章 アダージョ 4分の4拍子



四声の和音が多用されている。この和音は、当時はアルペジオで弾いていたと考えられる。曲の始めにふさわしい荘厳な雰囲気である。

3楽章 シチリアーノ 8分の12拍子 変ロ長調



牧歌的な舞曲で重音が多用されている。シチリアーノのモチーフが至る所から顔を出す。

4楽章 プレスト 8分の3拍子



昇ったり降ったり、かけめぐるような音型が繰り返される。

バッハ 管弦楽組曲第一番 ハ長調 (c-dur) BWV1066

バッハはこの曲を「管弦楽組曲」とは呼んでいなかった。もちろん「組曲」とも「Suite」とも呼んでいなかった。シューベルトの未完成な交響曲は複数あるにもかかわらず、ロ短調交響曲 D759 が「未完成」呼ばれたり※¹、ベートーヴェンのハ短調交響曲第 5 番が「運命」と呼ばれたりするのと同様で、近年は修正するようになってきているのだが、なかなか隅々にまで浸透するには時間がかかるようだ※²。

ではなんと呼ばれていたのかということ、単に *Ouverture* と呼ばれていた。曲を聴けばわかるが、4 曲とも壮大な序曲に 4 曲あるいは 6 曲の舞曲で構成されており、新バッハ全集でも「4 つの序曲 (管弦楽組曲)」と呼ぶようになっている。

ところで、バッハ作品番号 BWV は、ジャンルごとに分けられていて、作曲年代順にはなっていないので、分かり易いようで分かりにくい。特にこの序曲集は、今回演奏する「第一番」ハ長調 BWV1066 から「第四番」ニ長調 BWV1069 まで通し番号がついているのだが、いつ作曲されたのか諸説があり、結論が得られていなかった。最近の研究では、次のような順番ではないかと言われている。みなさんはどうお感じになるだろうか。

「4 番」(1716) → 「3 番」(1718) → 「1 番」(1718、「3 番」の後) → 「2 番」(1738/39)

※¹ シューベルト自身による標題は第 4 番「悲劇的」(Tragische) D417 の 1 曲である。

※² 第 6 番はベートーヴェン自身による表題で「田園」(Pastorale) である。(「英雄」や「合唱つき」についても述べたいところだが、紙面の都合上割愛させていただく。)

1. 序曲



緩—急—緩の三部からなるフランス風序曲。第一部は荘重なメロディで、付点のリズムをやや後ろに持って行きリズムカルな流れを出す。(今回、付点四分音符+八分音符については楽譜通りに演奏して、コントラストを出してみたのですが、いかがですか?)。

中間部はアラブレーヴェ (2 拍子) となり、軽快で生き生きとしたフーガとなる。オーボエファゴットのトリオが幾度となく顔を出す。最後に再び冒頭のメロディに戻り、終了する。

2. クーラント



アウフタクトから始まる 2 分の 3 拍子の軽快な舞曲で 2 部形式となっている。後半の方が長く、第 1 部の再現が含まれている。

3. ガヴォット



2 拍子 (アラブレーヴェ) のアウフタクトで始まる軽快なガヴォットは、ガヴォット 1 →ガヴォット 2 →ガヴォット 1 と演奏される。

ガヴォット 2 ではダブルリードのトリオに対し、弦楽器がトランペット風のファンファーレを奏でるのが面白い。



4. フォルラーヌ



この6拍子のフォルラーヌもアウフタクトで始まるのだが、楽譜にある軽快な旋律に対し、2nd ヴァイオリンとヴィオラによるぐるぐる回るような動きと、オクターブの通奏低音の動きがコントラストを醸し出している。

5. メヌエツト



明確なメヌエツト 1 と弦楽合奏のメヌエツト 2 との対比がよい。



因みに、アウフタクトではなく 1 拍めから開始するのは序曲とこのメヌエツトだけである。

6. ブーレ



ブーレ 1 は再びアウフタクトで始まるアラブレーヴェの軽快な曲。ブーレ 2 では、本来のトリオとなり、3 本のダブルリード (ob2、fg1) で、哀愁を帯びた旋律を奏でる。

7. パスピエ



軽快なやや落ち着いた曲。パスピエ 2 では、オーボエの流れるような旋律の下で、パスピエ 1 の旋律を中・高弦楽器が奏でる。

ハイドン 交響曲第1番 ニ長調 (D-dur) Hob.I-1

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (Franz Joseph Haydn) は1732年3月31日、オーストリア、ローラウ (ウィーンから南東へ39km) 生まれ。交響曲の父、弦楽四重奏曲の父。

1740年、聖歌隊のメンバーとなり9年間ウィーンに住む。1749年、フリーの音楽家として活動開始し、幅広く勉強するとともに、弦楽四重奏やオペラを作曲した。(後述するように、交響曲第37番はこのウィーン時代に作曲された。) 1759年ボヘミアで宮廷楽長の職に就き、その後約30年間数多くの曲を作った。1791-92年、1794-95年のイギリス訪問は大成功を収めた。1809年77歳没。ちなみに、モーツァルト(1756～91年)と親交があったことは知る人ぞ知る有名な話である。

交響曲を多く作曲していたため、この第一番も1759年作曲とも考えられていたが、前述のように、1758年にすでに交響曲37番が作曲されていることがわかり、初期の交響曲は1757年頃から作曲されていたであろうことが判明した。初期の交響曲の順番も不明なのだが、この「交響曲第一番」の冒頭を聞くとなんとなく「一番らしい」と思いませんか？

第1楽章 Presto プレスト (ソナタ形式)



軽快なテンポでクレッシェンドしていく第一主題で始まり、ホルンの切れのあるリズムを機に、ヴァイオリンによる第二主題へと繋がっていく。展開部は、冒頭と打って変わって下降音型で始まり、ホルンのリズムにヴァイオリンのシンコペーションが加わり、再現部に移るが、第一主題、第二主題ともに、呈示部と同じ調性である。

第2楽章 Andante アンダンテ (ソナタ形式)



弦楽合奏のみのハイドンらしい曲。冒頭の第一主題のアウトタクトの三連符がポイント。強弱を巧みに使い、展開していく。展開部は属調のD-dur(ニ長調)で始まる。第一ヴァイオリンと第二ヴァイオリンのカノン風な動きも楽しい。

第3楽章 Presto プレスト ソナタ形式



アウトタクトで始まる第一主題が切れ目なく繰り返され、躍動感をもたらしている(アウトタクトを除いて6小節め参照)。強弱を巧みに用いて属調のA-dur(イ長調)の第二主題を示し、短い展開部を経て再現する。再現部の第二主題は主調のD-dur(ニ長調)で、まさにソナタ形式となっている。

モーツァルト 交響曲第一番 変ホ長調(Es-dur) K. 16

この曲は、1764年に作曲されたモーツァルトの最初の交響曲である。演奏旅行のためにモーツァルト一家がロンドンに滞在しているときに作曲されたものと言われている。翌1765年2月21日にヘイマーケットの小劇場で初演された。

モーツァルトの洗礼名は Johannes Chrysostomus Wolfgangus Theophilus Mozart で、日本ではヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトと表記されるが、ヴォルフガングと表記すべきである。(車のVW、すなわち Volks Wagen がフォルクス・ワーゲンと表記されるが、本来フォルクス・ヴァーゲンであるのと同じである。)

生まれは1756年1月27日、神聖ローマ帝国、ザルツブルク。ウィーンから西に約300km。1764年作曲ということで、8歳の時の作品である。(1791年12月5日没)



急—緩—急の3楽章構成。モーツァルトの初期の交響曲はこのような3楽章構成である。

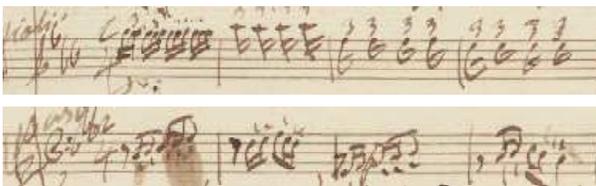
第1楽章 Allegro Molto アレグロ・モルト ソナタ形式



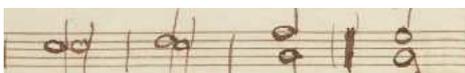
変ホ長調のドーミーソーで始まる「とても元気な」曲である。お約束通り、転調して B-dur(変二長調)となる。8歳でソナタ形式を

理解していたのか、自然に習得していたのか？

第2楽章 Andante アンダンテ



中高音弦楽器の三連符による刻み(左は1st Vn)、と管楽器(オーボエとホルン)によるハーモニーに、低弦のメロディが進行していく(左はチェロ&コントラバス)。



←7小節めのホルンに注目してほしい(in Es)。第41番ハ長調 K. 551の終楽章で有名なため「ジュピター音型」とも言われるが、モーツァルトの他の曲でもいくつか出てくる(ネットで検索すると出てくるので、ぜひ!)。ハイドンの交響曲第13番 D-Durでも使われており(モーツァルトはまだ7歳)、当時人気のあったメロディだったのかもしれない。

第3楽章 Presto プレスト



速い(といっても現代のイメージのプレストのような急速ではない)フィナーレ。古典

的な(ハイドンのような)強弱の対比が見られる軽快な短い曲。

Vn solo & コン・ミス 藤本舎里

3歳より才能教育研究会にてヴァイオリンをはじめる。東京藝術大学を経て、同大学院修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部及び高校の部第2位。五十嵐由起子、澤和樹、景山誠治、故ゲルハルト・ボッセ各氏に師事。川口市芸術奨励賞受賞。奈良県出身、川口市在住。

指揮・オーボエ 山口尊実

幼少よりピアノを始め、小学生でトランペットを始める。中学の管弦楽部でオーボエに出会い、以後オーボエを続ける。宮本文昭、シェレンベルガー、茂木大輔、ルルー各氏らの演奏会や公開レッスンに足繁く通う傍ら、斎藤享久、渡辺克也各氏らに師事。
楽器：Ob:LF, EH:Bulgheroni 趣味：S660、virago1100、Monoski、ScubaDiving、糖質制限

member 敬称略 五十音順

1st vn	藤本舎里、渡邊昭子	ob	大山明子、原愛、山口尊実
2nd vn	大友江利子、栗田愛子	fg	下田千春
va	高橋良暢	hr	林義昭、松沢宗一
vc	大和伸明		
cb	森田章		

◎団員募集しております。詳細はHPにて！

次回演奏会のお知らせ

11月24日(土) 14:00開演
リリア 音楽ホール

曲目

バッハ：管弦楽組曲第2番
vn と ob のための協奏曲
ハイドン：交響曲第2番、37番
モーツァルト：交響曲第4番、第5番



第2回演奏会
2018年11月24日(土)
13:30開場 14:00開演
リリア 音楽ホール
〒350-0101 埼玉県川口市花巻1-5
全席自由 800円

川口室内合奏団 (Kawaguchi Chamber Ensemble)

<http://kce.saitama.jp> (「kce.saitama」で検索！)

mail: bur@kce.saitama.jp